



母ちゃんは地震に負けずにおまえを産んだ

阪神・淡路大震災のストレスが妊産婦および胎児
に及ぼした影響に関する疫学的調査

補 遺

1996年9月



兵庫県産科婦人科学会

兵庫県医師会

はじめに

この本は、阪神・淡路大震災に被災した妊婦が書き綴った生々しい被災体験を記録したものである。

大震災後の混乱と苦難に満ちた被災生活にめげず、多くの妊婦の方がたが雄々しく出産を終えられたことに大いなる敬意を表するとともに、近い将来、わが国のいずれかの地域で起こるであろう次の大災害に際して、妊産婦を護るための指針となることを切に願ってやまない。

1996年9月1日 防災の日に

兵庫県産科婦人科学会
兵庫県医師会

摘 録

1. 本書は兵庫県産科婦人科学会と兵庫県医師会が1995年秋におこなった「阪神・淡路大震災のストレスが妊産婦および胎児に及ぼした影響に関する疫学的調査」の報告書（1996年3月刊行）の補遺である。
2. 前記調査のなかで、兵庫県下の全産科施設に依頼して、1995年1月17日から同4月16日までに出産した妊産婦に送付したアンケートに対する回答の中から、地震の時に被災地域（10市10町）に居住していた妊産婦からの回答を対象とした。
3. 同アンケートの問21「地震に限らず、大災害、風水害などの非常事態にさいして、妊産婦に対する医療や援助などで、どのようなことを希望されますか」に寄せられた回答1924通を収録した。
4. アンケートの詳細については前記報告書を参照願いたい。
5. 被災妊産婦の生々しい声を伝えるために、出来るだけ原文に忠実に書き写し、誤字、脱字などはあえて修正を加えなかった。
6. 本書では批判、叱責の対象となった医療機関や行政に反論の機会が与えられていないので、公平を期するために、感謝、称賛の対象となったものも含めてこれらの固有名前は全て伏せ字とした。
7. 収録は被災地区別に出産日の順とした。
個々の回答は、被災時居住していた住所、出産経験、出産日、出産時の妊娠週数、分娩様式、出産した産科医療施設の住所、および回答の順に記載した。
8. 本書の刊行は（財）日母おぎゃー献金基金、および（社）神緑会の支援によった。紙面を借りて感謝申し上げる。

まえがき

「聞け！たらちねの声」

「聞け！わだつみの声」という言葉を聞くと、当時の体験をまざまざと心に再現できる方がた、あるいは頭でなら理解できる人びとがおられる一方で、聞いたこともないという若い世代が増加の一途をたどっています。戦後50年、この言葉は消えつつあるのかもしれませんが、当初、本書のタイトルを「聞け！たらちねの声」にと考えておりましたが、現在はともかく、近い将来には本家の「聞け！わだつみの声」を知らない世代が大半を占めるので、阪神・淡路大震災に苦難した妊産婦の体験談を将来に残そうという本書の意図にそぐわないのではないかという忠告を周りの人たちから受けました。あの大戦争の記憶ですら、わずか50年で風化しつつあるので、今回の震災の体験談などは数年もたたぬうちに巷間に埋もれてしまうのでありましょう。

兵庫県産科婦人科学会は阪神・淡路大震災が妊産婦、胎児と産科医療におよぼした影響について調査し、それを後世に遺すことがわれわれ被災した産科医師の努めであると考え、兵庫県医師会の協力のもとに1995年9月より総合的調査をおこない、その結果を調査報告書「母よ、あなたは強かった!!」として1996年3月に刊行いたしました。本調査は妊産婦、産科医師、産科医療施設、および出生届を対象とした調査に基づく実に膨大なもので、関係分野の方がたから一応の評価をいただくことが出来ました。

しかし、報告書が妊産婦の声をあますことなく代弁することが出来たのかという点については自省させられることが多々あります。被災状況を解析してその結果を数値化すればするほど、妊産婦の苦難に満ちた被災生活を物語ることからかけ離れたものになったのではないかと、隔靴搔痒の感をおぼえます。本書に書き記した1924人の妊産婦の声は、震災後の苦難を乗り越えて出産した実体験に基づくだけに、迫力をもって読み手の心に迫ります。とはいえ、妊産婦が大災害時の周産期救急医療に対して抱いている多種多岐にわたる希望や要求事項のなかには、ともに被災した医師個人や医師会の努力範囲を越えたものが散見されます。本書においては、心ならずも批判、叱責の対象となった医療機関や行政に反論の場を提供していません。自ら被災しながらも医療救護活動に献身された多くの人びとやボランティア医療団の方がたの中には妊産婦の声に心外の念を持たれた向きもあろうかと思われまます。

ともあれ、震災より2年目、ようやく当時の事柄を落ち着いて回想できる時期になりました。震災を体験された方がたは、おのこの被災体験に照らし合わせて、本書を冷静に読解出来るので、妊産婦の声がかならずしも全ての的を得ていないことが判断できます。しかし、震災を体験しなかった他府県の人や後世の人びと、あるいは同じ被災者でも医療関係以外の方が読まれる場合を考えると、生々しい記録集であるだけに、ややもすれば情に流されて、客観的に判断できないことが危惧されます。読者の方がたには、本書を冷静に公平な目で判読していただくために、医師会や行政が震災後に刊行したいわゆる「震災時の医療活動記録集」などもぜひとも併読されて、総合的に客観的な判断をされることを切望いたします。

もとより、本書の目的は震災後の苦難を乗り越えて出産した妊産婦の体験を記録するにとどまらず、災害時に妊産婦を護る方策を考える場合の資料として役立てることにあります。震災後2年目の防災の日にあたって、国、自治体、医師会などは種々のハイテク設備を中核とした新しい災害救急医療体制を発表いたしました。寄せられた1924人の妊産婦の声が反映されたものであることを心より願ってやみません。本書の刊行をもって、アンケートにご協力いただきました多くの妊産婦の方がたにたいするお礼といたします。

(調査担当 大橋正伸)

「阪神・淡路大震災のストレスが妊産婦および胎児に及ぼした影響に関する疫学的調査」

調査主体

兵庫県産科婦人科学会
社団法人・兵庫県医師会

調査支援

財団法人 日母おぎゃー献金基金
社団法人 日本母性保護産婦人科医会
社団法人 神 緑 会

調査協力

兵 庫 県	淡路産婦人科医会
尼崎市産婦人科医会	明石市産婦人科医会
西宮市産婦人科医会	高砂市産婦人科医会
川西市産婦人科医会	加古川市産婦人科医会
伊丹市産婦人科医会	北播磨産婦人科医会
芦屋市産婦人科医会	丹波産婦人科医会
宝塚市産婦人科医会	姫路市産婦人科医会
神戸市産婦人科医会	(順不同)

調査助言

前神戸大学衛生学教授 村上 宏

集計・解析指導

神戸電子専門学校

発送・回収作業協力

明治乳業、森永乳業、雪印乳業 (順不同)

調査担当

兵庫県立こども病院周産期医療センター 大橋 正伸



「阪神・淡路大震災のストレスが妊産婦および胎児に及ぼした影響に関する疫学的調査」

補 遺

発行日 1996年9月1日

編集 兵庫県産科婦人科学会

〒650 神戸市中央区楠町7丁目5番1号、神戸大学医学部産科婦人科学教室内

電話 (078) 341-7451

